

外国人の子どもたちを受け入れる公立学校の課題

―日高町の小学校の現状から

木下直志

◇ 身近に増える外国人住民

日高管内では、特に軽種馬産業で、コロナ禍の状況に関係なく人手不足が続いています。近年、不足する働き手を確保するために外国人に頼るという状況になっており、日高町でも多くの外国人の方が働いています。

二〇二〇年八月の数値でみると、日高町内に住んでいる外国人登録者数は二七カ国で二八二人。その国籍の内訳は、インド一〇七人、フィリピン七五人、中国一六人、ベトナム一二人、ベネズエラ一人と続きます。インドとフィリピンが突出していて、多くは牧場やホッカイドウ競馬門別競馬場などで働いています。町内の軽種馬産業は多くの外国人労働者に支えられており、このような傾向は今後も続いていくと予想されます。

町内のスーパーなどで買い物する外国人を見かけることは当たり前のようになっていますが、生活習慣や食生活などが大きく異なることから、仕事ばかりでなく、地域にどのように馴染んでいくかが大きな課題であると思われれます。

◇ 本校の特徴

現在の日高町は二〇〇六年に旧日高町と旧門別町が飛び地合併して誕生した町です。筆者の勤める小学校は、日高山脈を源流とする沙流川の河口に位置し、農村・漁村・都市部が混在する地区にあります。二つの国道の分岐点の周辺を校区とし、開校一四〇年余の歴史と伝統があります。一九五九年には、二四学級、一〇〇〇人を超える児童数となったため、校舎の増築工事を行いました。その後は年々児童数が減少し、二〇二一年四月一日現在では特別支援学級を含めて一五学級・二七三人となっています。

通学範囲が広いため、スクールバスや自転車通勤している児童も多く、一九八八年に交通安全宣言を制定し、交通安全集会を毎年行なうなど、交通安全への取り組みを継続しています。

保護者の職業は、公務員、農業、運輸業、サービス業、軽種馬産業などに従事する割合が高く、家庭の経済状況は比較的安定していると言えます。

◇ 本校における外国人の子どもたちの学校生活

本校には現在、フィリピン人の子ども（五年生女子）一名と、ベネズエラ人の子ども（一年生女子）一名の合計二名が通っています。

フィリピン人の子どもは、昨年度までは卒業した兄と二人でスクールバスで通学していました。両親は町内の軽種馬の仕事に就いていて、日本語はほとんど話すことはできませんが、二人とも日本語を読み、書き、話すことができます。学校ではすべて日本語。友だちのおしゃべりも日本語です。一見すると日本人、よく見ると外国人という感じで、学校での生活には何の不安も支障もありません。ただ、書き言葉の難しい言い回しや慣用語など、一読してもわかりにくいような表現には苦労させられているようです。しかし、両親は日本語でのコミュニケーションをとることが難しいため、学校や学級から出される文書（学校だより・学級通信など）は子どもから聞いて理解したり、必要に応じて、英語の堪能な支援員（会計年度任用職員）に訳してもらったりして対応しています。

今年度（二〇二一年度）に迎えた新一年生として、誰が見ても、明らかに外国人の女の子が一名入学してきました。二月に行われた新入学児童の一日入学の時から教職員が注目していたベネズエラ人の子どもです。日本語はどれくらいできるのだろうか、人とのコミュニケーションはうまくとれるのだろうかということが重要な点でした。私も一日入学のレクリエーションに加わり、一緒に手をつないでゲームで遊びました。その結果わかった

ことは、先生の指示はほとんど理解できてはいないものの、周りの子の動きに合わせて、まねして動くことができ、楽しむこともできるということでした。ベネズエラ人の両親は、地元の比較的大きな軽種馬牧場に勤めていて、スペイン語を話します。現在、母親が週二回、基本的な日本語の学習を受けていますが、まだまだ会話ができるまでには至っていません。

一年生の子は現在、国語はひらがなの読み・書き、算数は一から一〇までのたし算やひき算を学習しています。前述した一名の支援員が付きつきりサポートしていますが、他の子と同じように四五分間の学習を集中して行うというのは一年生にはとても大変なことです。ましてや、担任の先



生の言葉がほとんど理解できないのですからなおさらです。

また、まだ一年生ですから、人に甘えなくなることもありませう。この子は特にそのような傾向が強いから、ほめながら、励ましながら、時々甘えさせながら、頑張つて学習をさせています。しかし、一名の支援員もスペイン語を使うことはできないため、スペイン語の音声アプリを活用する場面もあるようですが、うまくコミュニケーションをとることが難しい場面も多くあり、その場合は、日本語を何度も話して覚えてもらおうようにしているようです。もちろん、スペイン語の通訳がついていけばよいのですが、それは難しいことです。支援員に聞くと、「海外旅行者が携帯して活用する同時音声通訳機を買ってもらえたら……」とのこと。すでに今年三月から要望はしているのですが、まだ実現には至っていません。

私は現在、縦割り班（一年生から六年生までで構成された異学年集団）による清掃活動で、ほぼ毎日、この子と同じ清掃場所を担当しています。「せんせい」、「こくばん」、「ぞうきん」、「モップ」などのほか、「じてんしゃ」でころんで顔が傷ついたことを身振り手振りで教えてくれたり、「イヤ」、「ダメ」と言つて六年生を困らせたり、手をつないだり、手を伸ばして「だっこ」をおねだりしたりと、様々な表情に加えて、覚えてたての単語を並べて、自分からコミュニケーションをとるようになってきました。

◇ 外国人住民の増加のもとで学校に必要なこと

本誌六二八号（二〇二一年五月号）掲載の「在留外国人統計」に基づく道内市町村別の在留外国人数の推移によると、二〇二〇年六月現在、ほぼすべての自治体で外国人が暮らしていて、その数は全道で約四万人に上っています。

外国人が家族みんなで日本・北海道で暮らすとなれば、言葉はもちろん、生活習慣や食文化など、障壁となることは数多くあるはずですが、その中の一に学校教育も含まれます。

「小学校学習指導要領」が二〇一七年に改訂され、小学三年生から外国語活動が行われるようになっていきます。ALT（外国語指導助手）を交えた英語の会話を中心とした授業が多く行われていますが、これからの学校は、様々な国籍の子どもたちが学ぶようになっていくことが容易に予想できます。英語に特化するばかりでなく、諸外国の生活や文化にも視野を広げていくことが必要になるのではないのでしょうか。あわせて、外国人の子どもたちの学ぶ権利が十分に保障されるよう、人的・物的環境整備も行われていかなければならないと思います。

木下直志（きのした なおし）

一九八八年、えりも町で小学校教員となり、以降、日高管内の小学校に勤務する。現在校は五校目。